

はだて だいすけ
羽立 大介さん (広島市佐伯区出身)
2018 年度 1 次隊 青年海外協力隊
派遣国：ガーナ 職種：障害児・者支援
2020 年 8 月 9 日 (日) 中国新聞 SELECT 掲載



※中国新聞社の許諾を得ています

原爆の被害・復興伝える

乾期には最高気温が45度に達する日も珍しくないガーナ北西部にある盲学校。私の配属先だ。そこで私は視覚障害のある生徒に、パソコンの操作指導や体育の授業を行っていた。放課後にはブラインドサッカーを教え、校外で普及活動をすることもあった。



真剣な表情で折り鶴を作る生徒たち

赴任して間もな

い頃、広島出身の先輩隊員に「原爆展をするから協力してくれないか」と打診された。原爆投下までの背景、被害、戦後の復興の様子などをスライドショーにまとめた。現地の高校生 500 人以上が真剣に耳を傾け、中にはメモを取りながら聞く生徒もいた。

会場周辺に掲示したポスターにも目を通し、「ヒロシマ・ナガサキ」に対する彼らの理解は深まったのではないだろうか。被爆から 75 年が経過した。被爆者から直接話を聞ける機会はいずれなくなる。一方で、伝達手段の多様化により、今までより多くの人に伝えることが可能になった。

国際協力機構 (JICA) の海外協力隊員も赴任した国でその役割を担っている。ガーナにいる間、計 4 回、700 人ほどに原爆のことを伝えた。私がこれまで聞いた体験談と比べると内容はかなり薄いですが、多くの人に原爆の悲惨さや戦後復興の様子を伝えられたのは良かったと思う。

新型コロナウイルスの影響は当然ガーナにも及んでおり、友人や同僚への心配は尽きない。彼らの明るい笑顔が恋しい。今は一日も早い収束と隊員の派遣再開を祈り、日本にいる間にヒロシマ・ナガサキのこと、日本のことをより深く学びたい。